

知識探訪

多民族社会の横顔を読む 協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

日本人学生のASEAN短期留学盛況

木村かおり (マラヤ大学言語学部講師)

マレーシアの名門校マラヤ大学には学部以外に予備教育部というものがあり、ここの1コースで学んだ学生が政府派遣で日本へ留学する。最近はその動き、つまり来馬する日本人学生が急増している。本稿では、このような学生の動きを観察し、学生の動きに関わる日本語学習ニーズと派遣元派遣先への課題を共有したい。

国際交流基金の調査からマレーシアの日本語学習目的の特徴として、「日本への留学」が世界平均数値より高いという点があげられる。実際に高等教育機関における日本語教師の約45%が留学準備のための4つの日本語予備教育機関に所属している。その配置から高等教育機関は最大の日本語学習ニーズを日本留学のための日本語予備教育と考えていることがわかる。

これらの外国政府派遣留学生を含めた日本の留学生数は123,829人(文部科学省2008年調査)で、その後も数を伸ばしている。これに対し、日本から海外に留学する日本人学生は66,833人(同)で、対前年比約11%減という状況である。しかし、その減少傾向は欧米圏への留学で起こっており、アジアへの留学は増えているという試算もある。短期派遣に関しては、2012年に安倍首相がその任に戻り、新たな動きが起こっている。まず、「Japan-East Asian Network of Exchange for Students and Youthsプログラム」(外務省)が復活し、「2014年日本語パートナーズ派遣事業」(国際交流基金アジアセンター)が始まった。「トビタテ!留学JAPAN日本代表プログラム」(文部科学省)など留学を後押しする動きが活発化している。

多くの大学間では、このようなプログラムを待たなくても協定を結んでおり、相互に行き来する機会がある。しかし学生の動きは鈍かった。その理由の一つに費用の問題があったと考えられる。ところが、2012年に採択された「大学の世界展開力強化事業：東南アジア諸国連合(ASEAN)諸国等との大学間交流形成支援」をはじめASEANとの協定を生かしたプログラムを作ることで、文部科学省を通して教育機関に助成金等予算がつくことになった。これにより、現在多くの教育機関がグローバル人材の育成という目的を持ってマレーシアの教育機関を訪問している。



マラヤ大学の人事課などが入居する施設 (同大提供)

の主目的が英語教育、理系教育であっても、何らかの形で訪問先に日本語教育実施機関が選ばれることが多い。これ

は訪問先に日本人学生のバディーになれる日本語学習者、日本人もしくは日本語を話す教員のいる機関を希望するためである。グローバル人材育成には、対人の国際交流が必要であると考えられているからである。さらには高校の修学旅行だけでなく、県職員や日本の企業の研修でも、マラヤ大学に声がかかっている。

日本人の訪問により、教室にオーセンティックな(真正の)日本語学習の機会が生まれた。「留学のために日本で必要な日本語力」が大きな学習ニーズであることには変わりがないだろうが、「マレーシアで日本人と交流するために必要な日本語力」という学習ニーズも増した。マレーシアの日本語教育を考えると、このニーズの増加は喜ばしいことである。

しかし、これらの訪問は二つの課題を生む。現場の日本語教師は、オーセンティックな日本語学習の場で日本語学習者が最大限学べるように既に立てているカリキュラムに日本側のプログラムをどう取り込むか受け入れを調整する必要がある。また、これらの訪問を「オーセンティックな生の日本語学習の機会」とせず「生の日本人とおしゃべりするだけの機会」で終わらせないように受け入れ内容を計画する必要がある。今までの対人交流を主目的としない文化交流が「生の日本人とおしゃべりするだけの機会」で終わっていた可能性がある。グローバル人材育成という目的で来る日本のプログラムを中・長期的に有効に活用することを考えなければならない。

二つ目の課題は日本側へのものである。受け入れ先にただリクエストだけするのではなく、受け入れ先がどの程度、プログラム内容を受け入れられるかを十分考えなければならない。ASEANのホスピタリティとして、実行が難しくても受け入れを断らない可能性があるからである。日本出発前に入念に計算された計画の一部が実行できずに終わってしまったプログラムがすでにある。受け入れ先の受け入れレディネス(準備状態)を把握しながら計画をする必要がある。

最後に要望を述べる。自分たち日本人の育成だけを考えて研修プログラムを作るのではなく、機関間のやり取りを通じて、ASEANの学生や教育機関のグローバル化、育成に貢献するプログラムを考えてほしい。国際交流基金アジアセンターの考える「学びあい、成長し合う、アジア」の実現のために。

< 筆者紹介 >

1965年、大阪生まれ。マラヤ大学言語学部講師。早稲田大学大学院日本語教育研究科博士後期課程(日本語教育学)在籍中。中国、マレーシア政府派遣プログラム日本語予備教育機関での講師を経て現職。専門領域は留学生日本語教育。協働実践研究会KL支部主宰。ACTFL口頭運用能力試験(OPI)テスター。